



# きずな

第8号

2022年11月4日(金)発行

めぞす学校像

「希望と笑顔があふれる楽しい学校」



## 後期がスタートしました。

後期がスタートし、先日は秋晴れのもと運動会が行われました。近年は運動会を開催することができず、規模を縮小してですが久しぶりの運動会でした。みなさんにとって大切な思い出となったのではないのでしょうか。季節の変わり目で、体調を崩しやすい時期でもあります。くれぐれも健康面には十分に気をつけて一日一日積み重ねて力をつけていってもらいたいと思います。何と云っても、継続こそ力なりです。みなさんにとって充実した成長の秋となるように頑張ってください。



## 11月20日は「世界子どもの日」!

「子どもの日」と聞くと5月5日を思い浮かべるのではないのでしょうか。実はそれとは別に11月20日に「世界こどもの日」という日があります。「世界こどもの日」とはすべての子どもが生まれながらにして持っている権利を再認識するための日です。その歴史について触れてみると、「世界子どもの日」は、1954年、世界の子どもたちの相互理解と福祉の向上を目的として、国連によって制定されました。そして、35年後の1989年11月20日、すべての子どもに人権を保障する「子どもの権利条約」が国連総会で採択されました。この条約が制定されたことにより、世界中で子どもの保護への取り組みが進み、これまでに多くの成果が生まれました。

この「世界子どもの日」を迎えるにあたって、改めて、「子どもの権利条約」をみてみましょう。この条約は、子ども(18歳未満)を権利をもつ主体と位置づけ、おとなと同じく、一人の人間としてもっている権利を認めています。さらに、おとなへと成長する途中にあり、成人していない子どもたちには配慮が必要な面もあるため、子どもならではの権利も定めています。この権利条約には、「命を守られ成長できること」「子どもにとって最もよいこと」「意見を表明し参加できること」「差別のないこと」という4つの原則があります。

しかし、成果が生まれる反面、未だにすべての子どもたちがその恩恵を受けられているというわけではありません。災害や紛争などに巻き込まれたり、教育を受けることができなかつたりと課題はまだあります。すべての子どもや大人が幸せに暮らせる世界を目指して、私たちも学びと成長をしていきたいですね。

生きる権利	育つ権利	守られる権利	参加する権利
 <p>すべての子どもの命が守られること</p>	 <p>もって生まれた能力を十分に伸ばして成長できるよう、医療や教育、生活への支援を受け、友達と遊んだりすること</p>	 <p>暴力や搾取、有害な労働などから守られること</p>	 <p>自由に意見を表したり、団体を作ったりできること。</p>

家庭人権学習の日(毎月第1日曜日)にご家族で読んでみてください!

## 「ありがとう」

静岡県浜松市立北部中学校3年 小木曾莉桜

「りおちゃんの言葉は私の薬」私はこの言葉に大きな衝撃を受けた。中学1年生の頃、クラスに「一型糖尿病」をもつ女の子がいた。彼女は食後必ず注射を自らの手で打つ。そして、血糖値が高すぎたり低すぎた際にはまた別の注射を打つ。毎日それをくり返していた。「打たなければ死ぬ」という恐怖、注射の痛み、当事者になってみなければわからないことだが、「辛く苦しいこと」だというのは私にもわかる。

入学し、彼女が自分の病気について明かしてから何日かたったある日、「なんであんな奴、俺らの学校に来たんだよ。」

そう、一人の男子が言ったのだ。その一言をきっかけに彼女は周りから以前とは違う目で見られるようになった。そしていじめへと発展した。

「病気をもっているから私達とは違うという勝手な偏見や差別、このようなことはあってはならない。」私はそう思った。でもそれを言えなかった。怖いから、いじめられるのが…。もし、自分にいじめのまどが変わったらどうしよう、と自分のことだけを考えていたのだ。結局、私がやっていたのは見て見ぬふりで、いじている人たちと何も変わらない。

私たちが彼女を見る目は悲しくなるほど冷たいものだった。私たちのその目や、ひとつひとつの小さな言葉がどれだけ彼女の心に傷をつけたことだろう。それから彼女は学校を休む日が多くなった。「今日もいねえじゃん、ラッキー。」「〇〇?誰それ?そんな奴いたっけ。」まだそんなことを言っているの?とはやはり言いたくても言えなかった。

ある日、彼女が過呼吸になっていた。私は、「大丈夫?」と声を掛けた。言おうと思って出た言葉ではない。無意識でとっさに出た言葉だった。「ありがとう」そう返って来た。“ありがとう”この言葉を聞いて今まで自分がしていたことを心底後悔した。人の心を傷つける言葉があるのなら人の心を癒す言葉もあるだろう。そして私がかけた「大丈夫?」という一言が傷ついた彼女の心を癒したのだと思う。“ありがとう”この一言で、私は「変わろう」と思った。だから私は声を掛け続けていこうと決めた。私が彼女を手伝っているのを見て、文句や悪口を言う人はたくさんいた。しかしその分「私にもできることある?」と私の見方をしてくれる人たちもいた。怖くて言い出せずにいた人は私以外にも大勢いたのだ。私が少し変わったことで周りにいる人たちも大きく変わった。人は人で変わると改めて思った。

たくさんの方が彼女と話すようになり彼女は元通り学校に来るようになった。本当に嬉しくて変わって良かったと思えた。

一年生終了と同時に私は引越すことになり、皆が私に手紙をくれた。ひとりひとりの手紙を読んでいくと、彼女からの手紙を見つけた。ぎっしりと文字がつまっていた、私へのお礼の分がそこにはつづられていた。そして最後の一文に「りおちゃんの言葉は私の薬でした」とあった。言葉にはそれほどの力があるのだと確信した。

私一人では、彼女へのいじめを止めることはできない。いじめは、いじめる人が変わらなければ終わらないと思う。でも、私一人でも彼女を助けることはできる。それは、一言かけるだけ。たった小さな一言でも、彼女にとっては大きいもので彼女の心を支えることができる。

はじめに一人変わることで周りも変わり、その周りも変わる。私はそのはじめの一人になりたい。そして、皆の心の支えとなる存在になりたい。これは私の夢だ。

自分自身を変えることというのはいじめを減らすために私ができる最善のことだと思う。

自分を変えるというのはとても難しいことだけれど夢を叶えるために私は実行してみせる。

私は彼女に出会えたことにとっても感謝している。私をこれほどに成長させてくれたのは彼女だ。そんな彼女に私は「ありがとう」の言葉を返したい。

(第40回全国中学生人権作文コンテスト法務大臣政務官賞)